



地震で倒壊した建物（ワン県エルジシュ、
10月29日撮影、難民を助ける会提供）

トレンド
2012

トルコ大地震 越冬に向けて支援の 継続は不可欠

二〇一二年一〇月三日、トルコ南東部のワン県タバナルを震源とするマグニチュード7.2の地震が起こり、ワン、エルジシュ両市内および近隣の村落で被害が発生した。一〇月三日、トルコ政府は死者六〇二名、負傷者四三五〇名、建物の倒壊四五七四棟と発表した。

日本の複数のNGOが現地での支援に加わった。その一つである難民を助ける会で、現地の支援活動を行った近内氏、および事務局長として会全般の運営を預かる堀江氏に、現地の被災状況と、支援活動の内容について話を伺った。

堀江良彰

難民を助ける会常任理事・事務局長

近内みゆき

難民を助ける会プログラムコーディネーター

迅速な対応を可能にしたJPFのシステム

——一〇月三日に地震が発生しましたが、どのように対応されましたか。

堀江 私たちは、もともとは一九七九年にインドシナ難民への

人道的支援を行う団体として設立されました。その後、インドシナに限定せず難民全般を広く対象とし、また定義上は難民ではありませんが、自然災害の被災者や途上国での障害者支援など困難な状況にある人々への支援も行っています。支援地域は通常は海外で、日本国内では阪神・淡路大震災（九五五年）、

中越地震（二〇〇四年）、そして昨年の東日本大震災で出勤しました。東日本大震災では、三月一日その日に出勤を決定し、翌々日の日曜日にスタッフ六名が仙台に向けて車で出発し、それ以降支援活動を続けています。

そのようななかで、トルコ大地震の報に接しました。私たちに限らず、いまなお多くの国内のNGOが東日本大震災での活動に多くの時間と労力を費やしている状況です。しかし、トルコでの被災規模が大きく、また日本が大変な状況で海外に目を向けにくくなっているときだからこそ、私たちができることを考えようということで、一〇月二六日に三名のスタッフを現地に派遣しました。

——迅速ですね。

堀江 地震が発生したのは一〇月三日の日曜日。翌月曜日に出動を決めて、メンバーを決め、現地を持っていくものを準備し、その時点で一番早く行ける航空券を確保し、二六日に出発しました。

私たちの活動は、がれきの下にいる人たちを捜索する救急救命でなく、基本的には物資の配布と、被災者の心のサポートが中心です。トルコはそれなりの経済規模があり、政府もきちんと機能していますから、政府の手が回らなくて物資が届いていない人たちに生活に必要な物資を届けることを目的と

しました。ですから、活動期間は二カ月くらいを想定し、状況を見て越冬支援が必要な場合は、それも踏まえて対応しようと考えました。

——初動においては資金面の負担も小さくないと思いますが。

堀江 最初期の活動には、ジャパンプラットフォーム（JPF）から支援を受けました。JPFができて二二年目に入ります。世界の多くの地域で、紛争で発生した難民・国内避難民、大規模な自然災害の被災者がいるなかで、国際緊急援助の必要性は大きくなっています。しかし一九九〇年代までは、日本のNGOが海外で活動するには、資金を中心に多くの制約がありました。そこで、NGO、経済界、政府が対等なパートナーシップのもとで一体となり、それぞれの特性を生かして援助を効率的かつ迅速に行うための支援組織をつくったわけです。政府の資金拠出による基金および企業・市民からの寄付を募ることによって、緊急援助の初動において、活動資金がNGOに迅速に提供されるようになりました。今回のような自然災害では、この仕組みがよく機能したと思います。

防寒が切実な要求

——実際に現地に行かれて、被災状況をどのようにご覧になりましたか。



昼食の炊き出しに列をつくる人々(ワン県エルジシュ、10月30日撮影、
難民を助ける会提供)

——現地ではどのような支援が行われているのでしょうか。

近内 まずは炊き出しや食料の配給です。地元のボランティア団体や政府の災害対策本部から派遣された人たちが中心になっていたりと思います。私が現地にいた一〇月末から一一月にかけて、気温が氷点下近いなかで配給に何百メートルも列ができるという光景が見られました。配給トラックがやってきたときに殺気立った雰囲気になったり、列の最後のほうで長時間待たされてイライラする人たちはいましたが、それも当然の状況だと思います。全体的にはとても落ち着いて

近内 最初に、ワン県内のエルジシュという町に入りました。

一〇月三日の地震で最も大きな被害を受けたところです。人々が住んでいる住宅が、建物によっては粉々になっていたり、一階部分が押しつぶされていたり、全体的にゆがんでいたり。道路のすぐ脇でテントを張って生活している人たちも少なくありません。ただ、特に目立った被害もなく建っているものもあり、一面が瓦礫の山というわけではありません。

いて、私が見る限りでは当時は治安が乱れるような状況はありませんでした。

——難民を助ける会としては、具体的にどのような活動をなさったのでしょうか。

近内 初日に、三人でエルジシュをくまなく見て回りました。そこで地元の人々の話をきくと、エルジシュは世界中からマスコミが入り、それがPRとなつてさまざまな物資が集まっ

ている。他方で同じワン県内にも支援が手薄なところ、ほとんど届いていないところがあるということがわかり、二日目は手分けしてエルジシユだけでなく近くの村も回りました。そのときに撮った写真などを持ち寄り、エルジシユ以外の支援の手薄な地域を支援地とすることに決めました。もともと経済開発が遅れた地域で、建物自体も非常に少なく、多くの人がテント生活を余儀なくされていました。

最初の二週間は、被害の実情や支援のニーズについて調査しながら、私たちの予算の範囲で緊急支援物資を配りました。食料、下着や生理用品、タオルなどですね。初動調査を終え、一カ月の延長を決めた段階で、これまでの物資の配布だけでなく、もう少し住民の話を聞いて、これまでは異なるニーズにも応えるようにしました。

——どのようなニーズがありましたか。

近内 最も切実な問題は寒さでした。朝晩氷点下になるにもかかわらず、多くのテント生活者が地面の上に直接毛布を敷くだけで生活していました。とにかく寒いという声が多かった。そこで地元の事情に詳しい方に聞くと、地面の上にスノコを置いて、その上に断熱材のようなものを敷くとだいぶ違うのではないかという提案があり、それらを配る予定でしたが、その支援を決めた日の夜、あの地震が起きたのです。

——物資の調達はどのように行いましたか。

近内 地元の業者からです。食料や日用品も現地の商店やスーパーマーケットから購入しました。ワン県全域が壊滅的な打撃を受けたわけではないので、多少地元の流れが機能していたことは幸いしました。

女性同士だから良かったこともあった

——現地の諸機関・団体との連携はいかがでしたか。

近内 現地では、政府はもちろんトルコ赤新月社やキムセヨクムなどが中心となって支援活動を行っています。キムセヨクムというのは「誰かいないの？」という意味で、国際的にも活躍しているNGOです。ワンにも事務所を構えており、相談に行くこともありました。もちろん日本の支援団体との情報交換も頻繁に行いました。

もう一つ私たちを助けてくれた人たちに、アーチという団体に所属している、災害専門の通訳ボランティアがいます。イスタンブールに本部を持ち、災害があると現地に事務所を構え人員を派遣します。これは、やはり大規模な被災となつた一九九九年のトルコ北西部マルマラ地震の際、海外からたくさんの方々が駆けつけてくれたにもかかわらず、英語を話すトルコ人が少なく、彼らの力を十分に生かしきれな

かったという反省から生まれた団体で、非常に士気が高かったです。

——その人々の力で効率的な援助ができたのですね。

近内 その要素は非常に大きいです。たとえば、物資を配るのは重労働ですから、男性のスタッフのほうがよいかと思います。被災者が必要ですかと尋ねると、村のおじさんは「俺たちは大丈夫だ。他に大変なところがあるから行ってやってくれよ」と言います。ただ、これには見栄もあって、女性を集めて話を聞くと、実は下着が、おむつが、といった現実的な要望があるのです。やや保守的なクルドの村では、男性の前では言いづらくても多いようですが、女性の通訳だから話してくれることも少なくなかったです。

——活動の最中だった一月九日に再び地震があり、宮崎淳さんが亡くなられ、近内さんも被災されました。今後の活動に難しさもあると思いますが。

近内 同じ志を持つ大切な同僚を失ったことは、いまだ言葉にならない悲しみです。まさに夢半ばでした。トルコ政府を始め、トルコ国民の皆様のさまざまな配慮、お心遣いに、心から感謝申し上げます。一月九日の余震の後、搬送された病院でテレビを見ていると、ついにワン県内のテントで凍死者が出たと

報じられました。六歳の男の子だったそうです。私たちの活動をもう少し続けられれば救えたかもしれないと思うと、たいへん残念な気持ちになりました。いまワン県内から人の流出も続いているようです。政府もNGOも限られた資源のなかで懸命に取り組んではいますが、まだまだ十分ではありません。すでに寒さはピークを迎えています。一刻も早い越冬の対策が必要だと感じています。

——難民を助ける会では、活動の再開を決定しました。

近内 昨年二月一四日から活動を再開しました。二回目の地震後、約一カ月間で防寒対策はだいぶ進んでいました。そのため、ワン中心部から離れた村々を対象に、食料や生活必需品を配布するほか、地震で各家庭にあったパン焼き窯が破損してしまつたため、共同のパン焼き小屋の建設、被災した小学校や保育園に、冬服や靴、鞆の配布などを行う予定です。

私は前職が新聞記者でした。新聞記者にとつてはニュースが何より大事です。先ほどお話した六歳の男の子が凍死したというのはまさにニュースで、昨年九月末まではそれを追いかけるのが仕事でした。しかしいまは、ニュースにならないような当たり前の生活をみんなが送れるようにすること、それに少しでも役立つことが使命だと感じるようになってきました。引き続き、効果的な支援を行っていきたくと考えています。■